

## 巡検（フィールドワーク）報告

テーマ：大学周辺の地理素材を発見しよう

実施日：2019年4月12日（金）

コース：兵庫教育大学正門→90度カーブ附近→兵庫教育大学前交差点→兵庫教育大学正門

参加者：南埜，阪上，石堂，井上，加茂，佐々木，田辺，婦木，鄭

日ごろ生活している身近な空間を確認しながら，地理的見方・考え方について学ぶことを目的とした。まず大学正門に集合し，各自の関心のある地理的事象を確認した。植生，マンホールや作付け作物など，人によって関心のある事象は異なる。植生について考える場合，気候との関係では熱帯林・温帯林・冷帯林，一年間の状態により常緑樹と落葉樹，葉の形状により広葉樹と針葉樹のあることの説明があった。90度カーブ附近では標高を確認した。スマートフォンのアプリで標高が確認できる。同地点の標高？メートルであり，意外と高い場所で日常の生活をしている。またそのような高い地点にもかかわらず，平坦な地形が広がっている。また作付け作物は米であり，そえに使用する水について考えた。兵庫教育大学前交差点付近では，この地域の開発の歴史を示す石碑，用水を運ぶ水利施設（用水路と逆サイフォン）を見学した。（南埜猛）

## 巡検（フィールドワーク）報告

テーマ：淡河川疏水巡検（TT博物館）

実施日：2019年7月24日（水）

コース：兵庫教育大学正門→淡河川頭首工→御坂サイフォン→吞吐ダム→練部屋分水所→  
（TT博物館）

参加者：南埜，阪上，石堂，井上，加茂，佐々木，田辺，婦木，鄭

この巡検の目的としては次の二つのことがある。一つ目は淡河川疏水の水が流れる道筋について、ダムやサイフォンなど施設の役割や歴史について確認しながら地理的見方・考え方について学ぶことである。二つ目は TT 博物館での親子学習会で用いる教材開発とその題材の確認である。早朝に大学に集合し、川の流れが載っている地図を確認し車で各ポイントを周りそれぞれの施設が疏水の中でそのような役割があるのか考察し確認した。一か所目は淡河川頭首工でその施設の役割について予想し、確認を行った。二か所目は御坂サイフォンで実際の高低差などを確認した。三か所目には吞吐ダムに行き、水の流れ役割について確認した。四か所目に練部屋分水所に行きその仕組みや位置について確認し、最後に TT 博物館を訪れた。TT 博物館では、御坂サイフォンで用いられていたパイプの新旧について見学し、サイフォンの模型を用いた実験を行いサイフォンの仕組みについて確認した。また、ここでは親子学習会当日の打ち合わせや、当日使用する教室、設備の確認を行った。（井上大幹）



写真1 御坂サイフォン  
出所 筆者撮影



写真2 吞吐ダム1  
出所 筆者撮影



写真3 吞吐ダム2  
出所 筆者撮影



写真1 練部屋分水所  
出所 筆者撮影

## 巡検（フィールドワーク）報告

テーマ：親子学習

実施日：2019年8月16日

コース：兵庫教育大学→TT博物館

参加者：南埜，井上，加茂，佐々木，田辺，婦木

日頃生活している中で、当たり前のように使っている生活用水の出所や、その水がどのような過程を通して流れてきているのかを学ぶことを目的とした学習会に参加した。まずTT博物館の中で淡河川・湛山疏水の成り立ちなどについて職員の方から説明を受けた。そののちに参加者の親子に対して淡河川・湛山疏水についての水はどこからきているのかといった授業を行った。その中での活動として節水についての意識を問いかけ、節水にかかわるイメージキャラクター作りを行った。（田辺勇真）

## 巡検（フィールドワーク）報告

テーマ：三草山に登ろう

実施日：2019年11月4日（月）

コース：兵庫教育大学→三草山→昭和池→南埜邸

参加者：南埜（途中参加）、阪上、石堂、井上、加茂、佐々木、田辺、婦木

大学周辺の地形を見るため、三草山に登り平野の様子を観察することを目的とした。

まず、朝に兵庫教育大学に集合した時点で、担当者の南埜先生が熱のため山に登らないというアクシデントに見舞われた。それ以外のメンバーで三草山に登り、人文地理学概説で学んでいる尾根を確認しながら三草山周辺の平野を観察した。三草山は播磨小富士とも呼ばれ、標高423.9m、1184年源義経が平資盛を夜半に襲撃した「三草山合戦」の舞台として有名な山である。畑・三草・鹿野の3ヶ所の登山口から、バリエーションに富んだ5つの登山コースが山頂に向かって延びている。今回は畑コースから登り、三草コースで下山した。山頂にある三草山神社には、京都から勧請した「学問の神様」菅原道真公が祀られている。山頂からは360度周辺が見渡せ、晴れた日には明石海峡大橋や淡路島が一望できる。今回は運よくうっすらとその様子が観察できた。また、この周辺は丘陵地で囲まれた山々が連なっていることやその山の多くでゴルフ場が存在することも確認することができた。また、下山した後にドローンの試運転をした。メンバー全員でドローンの飛ばし方を学び、実践した。その後南埜邸にお邪魔し、インドカレーやグリーンカレーなど、バリエーション豊かな昼食を頂いた。（婦木裕介）



写真1 三草山頂上（2019年11月4日撮影）



写真2 三草山畑コース登山口 (2019年11月4日撮影)



写真3 三草山周辺の景色 (2019年11月4日撮影)

## 巡検(フィールドワーク)報告

テーマ：ドイツの文化と教育を知ろう ～オランダを添えて～

実施日：2019年11月30(土)～12月8日(日)

コース：リュースハイム→デュッセルドルフ(デュッセルドルフ日本人学校)→アーヘン(アーヘン大聖堂)→ケルン(ケルン大聖堂)→アムステルダム(アンネフランクの家)→ライデン(風車博物館)→オーバーハウゼン(ドイツ国際平和村)

参加者：阪上, 加茂, 佐々木

ドイツの文化と教育を学ぶことを目的とした。フランクフルト空港に着いた際に、佐々木のパスポートロスト事件が起きた。ドイツについて最初に話した英語が「Lost passport」である。12月1日、リュースハイムで初のクリスマスマーケットを体験。ここでは、ホットワインを飲む人が多かった。ドイツの各地方で、オリジナルのカップを手に入れることができるのも魅力の一つである。私たちが飲んだお酒は、ビール、赤ワイン、白ワイン、たまご酒がある。たまご酒とは、甘い味が特徴で、その名の通り卵のようにまろやかであった。しかし、アルコール度数がワインと比べ、高いことが特徴である。やはりドイツで欠かせないのが、ホットドッグである。ドイツ語で「Brätwurst」である。ソーセージは、直径約3cm、長さ約20cmがほとんどであり、日本のソーセージよりも大きいことが特徴である。

クリスマスマーケットでは、ワインやホットドッグなどのソウルフードを嗜むとともに、くるみ割り人形やスノードームなどのクリスマスらしい様々なお土産を見て回った。中でも目を奪われ圧倒されたのが、クリスマスマーケットの景観と立地である。景観においては、夜に訪れるとオレンジ色にライトアップされ、広場の中央にそびえる大きなクリスマスツリーもその存在感を光によって残していた。その光景は、日本人が想像するクリスマスが凝縮されているものであった。屋台は木で小屋を表現したようなもので、赤や緑といった植物で装飾されていた。立地においては、クリスマスマーケットが駅あるいは観光名所の近くで開かれていることが特徴である。駅が近いと訪れやすく、また観光がてら立ち寄ることが可能となり、集客力と利便性の高さが見られた。実際、クリスマスマーケットは人混みが激しく行動が困難であった。また、ドイツは日本よりもスリの発生率が高いため人が密集したクリスマスマーケットのような場所を訪れる際には注意が必要だ。

次に、ドイツの教育をみてみよう。ギムナジウムでは、教科担任制で、日本の公立中学校のようであった。私たちが最も驚いたのが、職員室である。日本の学校の職員室のように一人ひとり机が与えられているのではなく、円テーブルが数個あり、和気藹々とお茶やお菓子を食べながら団欒していた。ギムナジウムの特徴として、午前中には、1～6時間目までが終了し、午後には、帰宅できるのである。教師も午後には帰ることができるので、日本の教育形態とほとんど違っていた。

最後に、私たちは、ドイツ語を一切学習せずに渡独した。言葉も通じない中で、少しの英語とジェスチャーで何とか過ごした。現地の人や同行した教員や学生のおかげでドイツ語を少しながら学ぶことができ、言葉の学ぶ楽しさを改めて感じる事ができた。「Mülleimer(ゴミ箱)」という単語を覚えた私たちは、その言葉を駆使し、ドイツの人たちにたくさんの笑いを届け、仲良くなる事ができた。(加茂祐樹, 佐々木悠里)



写真1 ドイツの Brätwurst

出所 筆者撮影 (2019年12月1日撮影)



写真2 ホット白ワイン

出所 筆者撮影 (2019年12月5日撮影)



写真3 世界遺産 ケルンの大聖堂

出所 筆者撮影 (2019年12月2日撮影)